

公開シンポジウム「子どもの生命性と有能性を育てる教育への提言」

教育実践コラボレーション・センターの設立記念企画として、2007年6月23日（土曜日）に芝蘭会館別館にて、「子どもの生命性と有能性を育てる教育への提言」と題する公開シンポジウムを開催した。京都大学大学院教育学研究科の田中耕治教授（本センター・センター長）と桑原知子教授の司会で会は進められた。

最初に、川崎良孝教授（本研究科・研究科長）、京都市の門川大作教育長、そして、田中センター長からご挨拶を頂いた。

続いて、本センターの副センター長である矢野智司教授による記念講演「子どもの生命性と有能性を育てる教育への提言」では、センター設立の趣旨と活動のビジョンが明快に提起された（詳しい内容は後述）。

次に、本研究科が継続的に連携を進めている三つの代表的なフィールド（京都市立高倉小学校、京都市立洛風中学校、京都府相楽郡南山城村野殿・童仙房地区）での取り組みについて、各フィールドを担っている教職員や大学院生から報告がなされた。

「高倉小学校における共同授業研究の取り組み」に関しては、まず大学院生の八田幸恵氏から、高倉小学校と本研究科教育方法学講座教育方法分野（教育方法研究室）との連携による授業研究「プロジェクトTK」の歩みが、大学院生の視点から報告された。教育方法研究室の大学院生全員が参加し、大学院生主体で進められる「プロジェクトTK」は、2007年度で5年目を迎えた。同プロジェクトでは、単元作りの一連の流れ（単元計画の練り上げ、研究授業、事後検討会、次の単元に向けての考察）を教師たちと共にしながら、授業改善を目指して活動を進めている。その長期にわたる共同研究の中で論点となったのは、教師と大学院生の関係の作り方、教師と大学院生が課題を共有する方法、そして、研究室内の大学院生の教育システムのあり方であった。大学院生集団は、これらの論点についてその都度暫定的な回答を示しつつ活動を進めてきたのである。八田氏は、「大学院生の発達モデル」も

紹介しながら、「プロジェクトTK」の歩みは、教師と大学院生が共に育ち合う土壤を作っていく過程であったとまとめた。

八田氏からの報告を受けて、高倉小学校の門田真澄教諭からは、2007年度の「プロジェクトTK」の活動について報告がなされた。2007年度になってからの共同研究の体制の変化が紹介された。前年度までは、教科ごとに教師集団と大学院生集団がチームを組んで活動を進めていた。だが、2007年度は、教育方法研究室のメンバーの減少もあり、大学院生全員が、高倉小の校内研究授業に応じて柔軟にグループを編成しながら共同研究を進めている。また、同年度は、子どもたちの学力を向上させるための課題や授業改善について議論しあう「学力向上委員会」が立ち上がり、そこに大学院生全員が参加している。そして、自ら学ぶ姿勢を育むべくグループ学習の進め方について話し合っている。報告を締めくくりに当たって門田教諭は、「教師が育つ、子どもが育つ、院生が育つ」というキャッチコピーを実感しつつ連携を進めていると述べた。

「新しい教育空間・洛風中学校における取り組み」に関しては、まず洛風中学校の河内正明校長から写真を交えての報告があった。2004年、洛風中学校は、構造改革特区の制度を活用し、不登校の子どもたちの学びの場として開校した。開校時の生徒数は45名であった。洛風中学校は、木のぬくもりを大事にしたり、教室の間に穴を開けて、途中でしんどくなった子どもが穴の向こう（図書室）に行けるようにしたりと、過ごしやすいつまみ雰囲気が目指されている。また、同校には、校則や決まりはない。あるのは、「誰もが心地よい風を感じながら生活できるためのルール」のみである。当初は将来のこともあまり考えていない子どもが大半だったが、教師や親と話をすることで進学したいと思うようになり、初年度末には、約9割の生徒が高等学校に進学した。2007年の時点で洛風中学校に籍を置いた子どもは100名を超え、1期生は高校3年生になっている。報告の中で、河内校長は、この子どもたちがこの後どういう風に一人立ちをしてゆくのかを見守ってゆくことが、中学校の大きな役割だと語った。



▶田中耕治センター長の挨拶



▶矢野智司教授による記念講演



▶門田真澄教諭の報告



▶河内正明校長の報告



▶内藤浩哉氏の報告

次に、大学院生の酒井律子氏からは、洛風中学校と本研究科（臨床心理学教室）との連携の内容が報告された。洛風中学校では、気になる生徒のことを心理的側面から理解することを目指して、教師と院生が一緒にケースカンファレンスを進めている。レジュメなどは準備せず、その子に関わっている先生が、それぞれの場面で、その時々様子を順番に語っていく。これにより、当該生徒のイメージを新たに発見したり、総合的に把握したりしていく。そして、院生は、教師の関わりの意味を、心理臨床の観点から言語化し意味づけてゆく。この取り組みは最初から院生主体で行ってきたわけではない。お互いにすり合わせて、何が提供できるのか、何が求められているのかを丁寧に考えていくことで現在の形に行き着いたのである。最後に酒井氏は、洛風中学校から、教育の原点を見つめ直す視座を取り出せるのではないかと述べた。

「野殿・童仙房での生涯学習の取り組み」に関しては、まず、野殿童仙房生涯学習推進委員会の内藤浩哉氏より、野殿・童仙房地区の歴史をふまえた報告がなされた。野殿・童仙房地区は、京都府唯一の村である南山城村の山の上にある。江戸時代は空白地であった童仙房は、明治時代に開拓地となり、戦後すぐにも開拓事業が行われ石川県や北海道から人々が入植してきた。現在も開拓の風土が息づいている。明治時代以来、童仙房の小学校は分校であったが、1982年に地域の人たちの努力で独立を果たした。だが、2006年、学校統廃合の動きの中で、野殿童仙房小学校も廃校が決まった。この事態に対して、2006年の1月10日に、内藤氏が知人とともに、本研究科の生涯教育学講座の前平泰志教授の研究室を訪ねたところから、このプロジェク

トはスタートすることとなった。2006年6月23日には、野殿・童仙房と本研究科との間で調印式が行われ、野殿童仙房生涯学習推進委員会が発足した。同委員会のイニシアチブの下、廃校になった学校跡地を利用してさまざまな活動が行われている。夏季セミナー、野菜作り、収穫祭、そして、2007年度には、フリーマーケットや地域通貨などにも取り組むべく「風と雲の市」を実施している。報告の中で、内藤氏は、現在が第三次開拓であると述べ、童仙房という場の持つ求心力を指摘した。

次に、本研究科の安川由貴子助教は、大学の研究室の側から、野殿・童仙房での取り組みの内容とその魅力を報告した。安川助教は、1982年の小学校の独立という出来事、また、現在その地域に住んでいる人たちの姿から、「開拓の気概」を日々感じながら取り組みを進めているという。異質なものの存在、異質なもののぶつかりあい、異質なものの交流、そのように一様でないことが、この活動の面白さにつながっている。そして、外に開かれた空間であることで、「市場」「農」「地域」などに関わる既存の価値観を問い直す場となっているという。野殿・童仙房の取り組みは、「これをしてください」とお願いしなくても、趣旨に賛同して自らやってみようという、人々の自ら動力と人々のつながりに支えられて成立している。安川助教の報告は、「ゆっくりと着実に取り組みが展開することを願う」という言葉で締めくくられた。

以上の報告を受けて、質疑応答では、フロアを交えて活発な議論が展開された。この間積み上げてきた大学とフィールドとの個別の共同研究の蓄積を、「教育実践コラボレーション・センター」としてどうコーディネートしていくのか、そこからどのような新たな可能性が展望できるのかという点。また、教育現場の教師たちが元気になるためのヒントについても意見交換がなされた。

参加者は約80名にのぼり、会場は満席状態であった。大学院生、大学教員、小中高の教職員の方はもちろん、一般市民の方々にも多数参加頂き、盛会の内に幕を閉じた。またその様子は、翌日の京都新聞でも紹介された。

（文責：石井 英真）



▶報告に聞き入る参加者